

# 所長方針

小杉信博・KEK 物質構造科学研究所

PF、UVSOR、HiSOR までは文科省学術予算(旧文部省)によって放射光施設<sup>※</sup>が作られてきた。学術3施設の後には、文科省科学技術予算(旧科技厅)によって SPring-8 が誕生し、さらに国以外の財源でも放射光施設が次々誕生した。つい最近、予算化が決まった 3GeV 次世代光源施設も、科学技術予算と国以外の財源で建設費を折半することが決まった。学術3施設における共同利用・共同研究が、このような日本の放射光科学の興隆につながっていると言って過言ではない。さらに、学術予算以外の予算が放射光施設建設に投入されたことで、海外では例を見ないほど、放射光利用研究の多様性・広がりをもたらしている。

このような国内情勢の中、最も古く30年以上前から整備されてきた学術3施設の役割を見直す時期になっている。日本放射光学会では、学術研究が果たす役割は、科学技術予算に支えられている施設から見ても、国以外の予算に支えられている施設から見ても、今後も非常に重要であり、学術3施設を中心にした学術基盤のネットワーク化が必要であると考えている。よって、この機会にPFが主導して、学術3施設全体をより魅力的にするように、知恵を絞って行動に移すことが重要である。

※ 国内では、物性研 SOR の時代から、“SOR(軌道放射)”という呼び名が使われてきた。世界に通じる“放射光”を名乗った施設はPFだけであり、放射光と言えばPF、という意識も古い世代にはある。KEKの機構化によって放射光実験施設がKEKの公けの組織から消えてしまったが、2019年度からは再び放射光実験施設が定義され、PF施設長も正式な役職になって、スタートすることになった。機構化の前の放射光実験施設と比較すると、共同利用に直接関わる部分だけが再組織化されたことになるが、従来通り、物構研の関連研究系ばかりでなく、加速器研究施設の関連研究系も含めて広くPFと呼ぶことにしている。